

令和 4 年 6 月 27 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2021

課題番号：16K12325

研究課題名（和文）高齢者が社会の新たな担い手として活躍する都市型高齢者社会貢献システムモデルの構築

研究課題名（英文）Construction of an urban social contribution system model for older people in which they play an active role as new leaders of society

研究代表者

中嶋 恵美子（Nakashima, Emiko）

福岡大学・医学部・教授

研究者番号：30461536

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,700,000円

研究成果の概要（和文）：地方都市部（福岡市）の前期高齢者と生産年齢層住民を対象に、高齢者の社会貢献活動に関する実態と生産年齢層住民の期待について調査した。活動をしている高齢者は22.2%で、活動の有無と性別・就業・健康観に有意差はなかった。生産年齢層の66.3%が高齢者の社会貢献活動に期待しており、「まちづくりや地域安全などの活動」や「子育て支援」「高齢者の生活支援」をあげた。しかし高齢者の活動参加は有意に少ない。

高齢者が「社会の新たな担い手」として活躍するには、社会貢献活動への参加の「きっかけ」づくりと、自分のできることをみつけそのスキルを身につけようとする「学び続ける姿勢」と「学べる場」を整えていく必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

地方都市部の前期高齢者の社会貢献活動の実態と同地域住民の高齢者の社会貢献活動に関する期待とを比較分析することで、地域オーダーメイド型の高齢者育成支援プログラムの開発につながる。また地方都市部の高齢者の社会貢献活動に関する課題を明確化でき、地方都市部において高齢者が社会の新たな担い手として活躍する都市型高齢者社会貢献システムモデルを構築する基礎資料を得ることができる。

研究成果の概要（英文）：We surveyed the actual situation regarding social contribution activities of older people and the expectations of working-age residents in a local urban area (Fukuoka City).

Among older people, 22.2% were active in social activities, and there were no significant differences between activity and gender, employment status, or health views. A total of 66.3% of the working-age population expects older people to contribute to society. In terms of activities, respondents expect "activities such as community development and community safety," "childcare support," and "livelihood support for older people," but older people's participation in these activities is significantly lower.

For older people to play an active role as "new leaders of society," it is necessary to create "opportunities" for them to participate in social contribution activities, and to provide them with "an attitude to continue learning" and "a place to learn".

研究分野：基礎看護学

キーワード：高齢者 社会貢献活動 社会の担い手

## 1. 研究開始当初の背景

2025年には団塊の世代すべてが75歳以上となり、後期高齢者の人口割合は18.1%に達する。医療や介護・福祉サービスの需要は急増し、社会保障財政は危機に瀕すると予測されている(厚生労働省, 2005)。団塊の世代は、戦後の日本経済を牽引し、消費文化や都市化などを経験した世代である。従来の高齢者とは異なるライフスタイルや価値観をもち(内閣府, 2012)、今までとは違う新しい社会システムの構築の重要性が増してきている。今後の高齢者は、ライフスタイルの多様化、健康寿命の延伸、就業意欲、社会貢献意欲が向上し、そのような変化への社会の対応として、1) 地域における高齢者の社会貢献を実現できるシステムの構築、2) 公的制度の充実とともに、様々な立場の人が関わるネットワークによる生活課題の解決などのコミュニティ再生を提案(平松道夫, 2009)している。高齢社会対策大綱でも、高齢者の主体的な地域社会への参画を促進するとともに、地域社会における相互扶助その他の機能が活性化するように、条件整備を図る必要性が指摘(内閣府, 2012)されている。

団塊の世代を始めとする今後の高齢者は、豊富な経験に基づく实际的・実用的・包括的知識と技術を持つ、貴重な人的資源である。高齢社会対策大綱においても、高齢者の意欲と能力を最大限活かすためにも、『支えが必要な人』という高齢者の固定観念を変え、意欲と能力のある65歳以上の者に社会を支える側に回ってもらうよう、国民の意識改革を図る必要性(内閣府, 2012)が言われている。

地域において高齢者の知識と技術等の能力を活用することは、高齢者の社会的自立や社会的交流を高め、「自分も役立つ」という自尊感情を維持し、高齢者の心の健康増進にもつながる。また高齢者同士の横のつながりとともに、世代間の縦のつながりも生まれ、高齢者理解が進み、『自助・互助・共助』の地域づくりに役立つ。しかし、高齢者の学習が、社会貢献活動等に結びつくことが少ない現状では、地域や生活の課題に向けた学習ニーズの把握や学習活動の組織化が必要であり、高齢者の教育面では、新たな学習方法や学習プログラムの開発が求められる(江澤和雄, 2013)。

これまで高齢者対策は、過疎化の進む地方の問題として考えられてきた。しかし、10年後に高齢者が急増するのは、団塊の世代が労働者として集まってきた都市部である。そのような都市部には、地方の過疎の地域とは違う高齢者対策が必要である。福岡市の65歳以上の人口割合の推移を見ても、2011年17.6%が2025年には24.8%、2035年には28.3%と急増する(福岡市, 2015)。都市部における高齢者の意欲と能力を活用した地域づくりは喫緊の課題である。

## 2. 研究の目的

地方都市部(福岡市城南区)に居住する前期高齢者を対象にした社会貢献に関する意識・意欲・活動内容等の実態調査と、同地域に居住する23~64歳の住民を対象にした高齢者の社会貢献に関する期待・要望等のニーズ調査を行い、高齢者が社会貢献活動をするために必要な能力を開発・活用する高齢者育成支援プログラムを開発し、高齢者が社会の新たな担い手として活躍する都市型高齢者社会貢献システムモデルを構築するための基礎資料を得る。

## 3. 研究の方法

(1) 地方都市部に居住する前期高齢者の社会貢献活動の実態を明らかにした。

調査対象：無作為抽出した福岡市城南区に居住する65歳から74歳の前期高齢者500名。

調査内容：個人の属性(年齢、性別、同居家族、就労状況、健康状況)  
社会貢献活動の実施状況(活動の有無、活動内容、活動開始のきっかけ、活動の効用、継続意思、今後やってみたい活動、若い世代が高齢者に期待する活動、参加しない人の理由)

(2) 高齢者の社会貢献活動に対する同地域生産年齢層住民の意識を明らかにした。

調査対象：無作為抽出した福岡市城南区に居住する23歳から64歳の住民500名。

調査内容：個人の属性(年齢、性別、同居家族、就労状況、健康状況)  
高齢者の社会貢献活動に関する意識(活動参加期待の有無、期待理由、活動の高齢者にとっての効用、参加に必要な要件)  
自身の社会貢献活動の状況(活動の有無、活動内容、活動開始のきっかけ、活動の効用、継続意思、今後やってみたい活動、参加しない人の理由)

(3) 前期高齢者の社会貢献活動の実態と同地域住民の高齢者の社会貢献活動に対する期待とを比較分析することで、地方都市部の高齢者の社会貢献に関する課題を検討する。

## 4. 研究成果

(1) 調査票作成に向けたカフェやワークショップの開催

調査票の作成および研究者が高齢者育成支援プログラムとして考えている『次世代育成活動』、『健康生活支援活動』、『独居老人サポート活動』のベースとなる企画として、「高齢者介護カフェ」の開催や「高齢者の食と栄養について」「成年後見制度について学ぼう」などのテーマでワ

ークショップを開催した。これらのカフェやワークショップの参加者に、高齢者が社会貢献に関して『したい』『できる』『できそうだ』と考える活動について、住民が高齢者に『してほしい』と考えている活動について聞き取りを行った。前期高齢者の社会貢献に対する意識は高く、仕事等の現役引退後は「何かお役に立てることをしたい」と述べる人が多かった。またそのような社会貢献活動をすることが、自分自身の心身の健康増進のためにも必要であると認識していた。しかし、具体的な活動内容については、町内会活動や学童の見守り活動等で、自分自身の居住地域に限定された活動をイメージしていた。地域住民においても高齢者に社会貢献を望む人は多いが、その活動内容は高齢者とほぼ同様であった。今後の社会の変化を見据え、新たな視座で社会貢献を考えることが高齢者にも地域住民にも必要であると考えられた。

### (2) 地方都市部に居住する前期高齢者の社会貢献活動の実態

福岡市城南区に居住する65歳から74歳の前期高齢者500名を無作為に抽出し、293名から回答(回収率は58.6%)を得、分析対象とした。対象者の平均年齢は、70.04±2.89で、60代が45.1%、70代が54.9%であった。性別は男性が43.3%、女性が56.7%で、47.8%が配偶者と二人暮らしであり、就労中が43.0%であった。健康状態は、64.2%が持病を有するものの自己の健康状況について「健康である」29.7%、「まあまあ健康である」55.6%と認識していた。持病では、高血圧(44.3%)腰痛や関節疾患(13.5%)糖尿病(13.0%)など慢性疾患を抱えていた。

社会貢献活動に参加しているのは22.2%の65名で、77.5%の227名は特に活動はしていなかった。社会貢献活動に参加しているか否かに性別・就業の有無・健康観による違いで有意な差はなかった。活動を始めたきっかけは52.3%が「知人・友人に誘われた」であり、「市政だよりなどを見た」は4.6%であった。活動内容は、「自治会、町内会などの自治会組織の活動」(52.3%)「趣味やスポーツを通じたボランティア」(23.1%)「社会奉仕などの活動」(18.5%)「子育て支援などの活動」(12.3%)「まちづくりや地域安全などの活動」(10.8%)「高齢者の生活支援などの活動」(6.2%)「伝統芸能や工芸技術などを伝承する活動」(1.5%)などであった。社会貢献活動に参加してよかったこととして感じていることは、「新しい友人を作ることができた」(55.4%)や「充実感が得られている」(47.7%)「地域に安心して生活するためのつながりができた」(46.1%)「日常生活にリズムができた」(41.5%)「健康維持や身だしなみに留意するようになった」(36.9%)であった。社会貢献活動の継続については、70.8%が「元気であればいつまでも継続したい」と回答した。

現在社会貢献活動に参加していない人の主な理由は、「時間的ゆとりがない」(35.2%)「体力的に自信がない」(29.5%)「参加するきっかけがない」(29.1%)「自分が何ができるかわからない」(17.6%)などであった。

今後やってみたい社会貢献活動は、「趣味やスポーツを通じたボランティア」(34.3%)「社会奉仕などの活動」(34.3%)「まちづくりや地域安全などの活動」(23.2%)「子育て支援などの活動」(13.5%)「自治会、町内会などの自治会組織の活動」(13.0%)「高齢者の生活支援などの活動」(17.7%)「伝統芸能や工芸技術などを伝承する活動」(4.4%)の順であり、実際の活動内容として最も多くの52.3%があげた「自治会、町内会などの自治会組織の活動」はやってみたい活動としては13.0%であった。

高齢者は、若い世代が高齢者に期待している活動として「子育て支援などの活動」(37.0%)「まちづくりや地域安全などの活動」(36.6%)を挙げる者が多かった。その理由としては、ひとり親や共働きでの子育てのゆとりのなさ、子どもの事故や虐待死報道などから、安心して子育てできる環境づくりが高齢者に期待されていると認識している記述が多かった。

高齢者が社会貢献活動に参加するのに必要な要件として、91.8%が「心身の健康」と答え、次いで「経済的ゆとり」(56.7%)「時間的ゆとり」(51.9%)「友人や仲間」(39.9%)であった。しかし「知識や能力を發揮する場」(25.6%)「知識や能力を伸ばす学習の場」(9.9%)をあげた者もいた。学習の場として自由記載では「パソコンやスマートフォンの操作技術」の希望が多く、「専門的な知識やスキル」や「居住する地域についての学習」などの記述があった。

### (3) 高齢者の社会貢献活動に関する同地域生産年齢層住民の意識

福岡市城南区に居住する23歳から64歳の成人500名を無作為に抽出し、181名から回答(回収率36.2%)を得、分析対象とした。対象者の平均年齢は、46.6±11.1で、40代が最も多く30.9%であった。性別は男性が41.4%、女性が58.6%で、86.2%が就労中でその45.5%が会社員であった。

66.3%が高齢者の社会貢献活動に期待しており、高齢者に参加してほしい活動は、「まちづくりや地域安全などの活動」(44.2%)「趣味やスポーツを通じたボランティア」(40.3%)「自治会、町内会などの自治会組織の活動」(38.6%)「伝統芸能や工芸技術などを伝承する活動」(34.3%)「子育て支援などの活動」(32.0%)「社会奉仕などの活動」(23.8%)「高齢者の生活支援などの活動」(21.0%)であった。高齢者に社会貢献活動への参加を期待する理由として、「豊富な経験や知恵を生かしてほしい」「安心・安全な地域づくりになる」という地域住民としての期待と「高齢者の健康維持や生きがいになる」という記述に大きく分けることができた。

高齢者に期待する社会貢献活動内容では、「まちづくりや地域安全などの活動」「伝統芸能や工芸技術などを伝承する活動」「子育て支援などの活動」「高齢者の生活支援などの活動」は生産年齢層住民の期待と高齢者の活動内容の実態とに有意な差があった。さらに、高齢者が今後やりた

い活動内容との比較をすると、「まちづくりや地域安全などの活動」「伝統芸能や工芸技術などを伝承する活動」では有意差はなくなるが、「子育て支援などの活動」「高齢者の生活支援」は有意差があった。

#### (4) 地方都市部の高齢者の社会貢献に関する課題の検討

内閣府の「高齢者の経済生活に関する調査」(2019年)によると65~74歳の社会的な活動を特に活動していない割合は59.8%である。本調査では同年齢層の活動している割合は22.3%、活動していない割合は77.5%で全国調査に比べ、活動をしていない人が多い。この社会的な貢献活動に参加していない高齢者をいかに参加に導くかが課題である。活動を始めたきっかけは52.3%が「知人・友人に誘われた」であり、「市政だよりなどを見た」は4.6%である。社会貢献活動に参加しない理由としても「きっかけがない」が29.1%である。どのように高齢者を社会貢献活動参加に導くかという点では、きっかけづくりが重要であるといえる。活動内容として多い「自治会、町内会などの自治会組織の活動」と関連させて考えると、特に長年の会社勤めを終え定年退職した男性にとってハードルが高いといわれる「地域デビュー」をどのように企画するか工夫が必要である。高齢者が社会貢献活動として活動している内容に、性差による有意差はない。しかし、「まちづくりや地域安全などの活動」に参加しているのは全員男性であった。地域の児童・生徒の登下校時の見守りなどは、仕事中心で地域とのかかわりが希薄であった男性には参加しやすいと考えられる。それをきっかけに地域の人々とのつながりができ他の活動参加にもつながると期待できる。

これまで人は人生を「学校で学ぶ時期」「就職し仕事に専心する時期」そして「仕事を引退後の時期」の3段階に分けて考えてきた。しかし、「人生100年時代」といわれる現在においては、長い人生の中で、社会の変化に応じて引退後も新しいことを学び、新しいスキルを身につけていく必要がある。「知識や能力を伸ばす学習の場」として、「パソコンやスマートフォンの操作技術」の希望が多く、その他「専門的な知識やスキル」や「居住する地域についての学習」などの記述もあった。高齢者が自分のできることをみつけそのスキルを身につけたいという「学び続ける姿勢」に着目し、まず「学べる場」を整えていくことが必要である。自分の得意や関心を生かして学ぶ場が高齢者の生活圏にあることが重要である。調査対象とした福岡市城南区には大学が複数ある。交通の利便性も高く、高齢者が出向くにも困難は少ない。それぞれの大学が強みを生かし、高齢者が社会貢献活動に参加するのに必要な「専門的な知識やスキル」を実践的に学ぶプログラムを提供していく、そのような地域と大学との連携も必要である。

前期高齢者の社会貢献活動の実態と同地域生産年齢層住民の高齢者の社会貢献活動に関する期待とを比較分析すると、生産年齢層住民は66.3%が高齢者に社会貢献活動に参加してほしいと考えているが、実際に活動している高齢者は22.2%である。若い世代が高齢者の社会貢献活動に期待している事実を高齢者に発信していくことが求められる。また活動している高齢者の実際の活動内容と同地域生産年齢層の期待する活動内容とは「まちづくりや地域安全などの活動」「伝統芸能や工芸技術などを伝承する活動」「子育て支援などの活動」「高齢者の生活支援などの活動」で有意な差があった。これらのギャップを埋めていくためにも「他の人の役に立つスキル」を身につけようとする「学び続ける姿勢」の必要性も発信する必要がある。そして、社会貢献活動をすることで「新しい友人」「充実感」「地域に安心して生活するためのつながり」などを得ることができ、住み慣れた地域で自分らしく生きていくための自助になっていることを、高齢者だけでなく生産年齢層住民にも発信し、引退後は新たな地域の担い手となる風土を作っていく必要がある。

高齢者の知恵や経験を生かし、世代を問わず支えあう地域づくりに参加したいと考える高齢者が、すでに持つ能力の活用だけでなく、高齢者の新しい能力を開発し、社会の新たな担い手となる人材として存在するには、高齢者が社会貢献活動への参加の「きっかけ」づくりと、自分のできることをみつけそのスキルを身につけようとする「学び続ける姿勢」と「学べる場」を整えていく必要がある。

#### <引用文献>

- 1) 厚生労働省、第1回介護施設等の在り方委員会資料、今後の高齢化の進展~2025年の超高齢社会像~、2005.
- 2) 内閣府、団塊の世代の意識に関する調査、2012.
- 3) 平松道夫、変貌する都市高齢者のライフスタイル - 「団塊世代」の地域貢献 -、日本都市学会年報、P145-150、2009.
- 4) 内閣府、高齢社会対策大綱、2012.
- 5) 江澤和雄、「超高齢社会」における高齢者の学習支援の課題、レファレンス、2013.8.
- 7) 福岡市ホームページ、福岡市の将来人口推計、2015.
- 8) 内閣府、高齢者の経済生活に関する調査、2019.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	塚原 ひとみ  (Tsukahara Hitomi)  (20555403)	福岡大学・医学部・教授    (37111)	
研究分担者	原田 春美  (Harada Harumi)  (70335652)	関西福祉大学・看護学部・教授    (34525)	
研究分担者	佐久間 良子  (Sakuma Yosiko)  (80554758)	福岡大学・医学部・教授    (37111)	
研究分担者	有田 久美  (Arita Kumi)  (60526523)	福岡大学・医学部・講師    (37111)	
研究分担者	中島 充代  (Nakashima Mitsuyo)  (60320389)	福岡大学・医学部・准教授    (37111)	
研究分担者	久木原 博子  (Kukihara Hiroko)  (50268950)	福岡大学・医学部・教授    (37111)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	木村 裕美  (Kimura Hiromi)  (00301359)	福岡大学・医学部・教授    (37111)	
研究分担者	兼岡 秀俊  (Kaneoka Hidetoshi)  (20161169)	福岡大学・医学部・教授    (37111)	
研究分担者	池田 佐知子  (Ikeda Satiko)  (70640275)	西九州大学・公私立大学の部局等・准教授    (37201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関